

凡例

(一) 此篇ニハ、古言、今言、雅言、俗言、方言、訛言、其他、漢語ヲ初トシテ、諸外國語モ、入リテ通用語トナレルハ、皆收メタリ、然レモ、甚シキ古言ハ、漏ラセルモアリ、且、漢語ハ、普通和文ニ上ルモノヲ限リトセリ、方言ハ、大抵、東西兩京ノモノヲ取リテ、諸國邊土ノモノハ、漏ラセルモノ多シ。

(二) 篇中、高尚ナル學術ノ專門語、又ハ、地名、人名、等ノ固有名稱ハ取ラズ、但シ、固有名ナレモ、神佛ノ名、禁闕、官殿ノ稱、官署ノ號、其他、器物ノ名等ノ、常ニ書冊ニ見ハルルガ如キハ取レリ。

(三) 熟語ハ、熟シテ別ニ一義ヲ起スモノヲ取レリ、「あかがひ」「赤貝」「いしばひ」「石灰」「やまどり」「山鳥」ノ如シ、而シテ、「まつやま」「松山」「すぎばやし」「杉林」「はるひせ」「春風」「くろくも」「黒雲」ナドハ收メズ、語毎ニ解スベケレバナリ、漢語、外國語ナルモ然リ。

(四) 從來ノ辭書ニハ、語ト句トノ別ナク、「あし」の「うら」「足之裏」「あぶき」の「ぢがみ」「扇之地紙」ナドヲモ出ダシタレド、是等ハ、自ラ三語ナルベク、其語ヲ各條ニ就テ見バ、解セラルベシ、サレバ、此類、一切除ケリ、但シ、句ノ如クニテ句ナラズ、一熟語トナリテ、別ニ一義ヲ成セルモノハ、如何ニ長クトモ、皆擧ゲタリ、「あまのむ」ハ「天河」「よめがしら」「介名」「きつね」の「かみそり」「草名」「たひのむ」「げんばち」「魚名」「げん」の「まづす」「まづすぢがみ」「申食國政大夫」ノ如シ、其長キハ、「りやうごう」の「おとひめ」の「もとひ」の「きりはづし」「海藻名」ヲ極トス。

(五) 動詞ノ熟語モ、別ニ一意ヲ成セルヲ取レリ、「こころう」「心得」「おちいる」「落入」「こころみる」「心見」「さひのぼる」「逆上」ノ如シ、而シテ、「あめもも」「歩行」「よみなはる」「讀」「ひきこるす」「書記」「うちならす」「聲鳴」ナドハ收メズ、箇箇ニ意ノ解セラルベケレバナリ。

(六) 名詞、又ハ漢語ニ、す爲トイフ動詞ヲ添ヘテ、ゑをりす〔榮〕あるべす〔導〕ざらんす〔議論〕とふうす〔工夫〕ナドト用井ルコアリ、是等、一箇ノ動詞ノ如クナレド、斯クナサバ、諸ノ名詞、漢語、皆、動詞トナルベキヲ以テ、今ハスベテ擧ゲズ、ゑをりす〔導〕ざらんす〔議論〕ト箇箇ニ解スベキナリ、但シ、つみす〔罪〕ものす〔物〕ふみす〔無〕けみす〔檢〕びす〔解〕かんす〔感〕おとす〔應〕とす〔具〕こうす〔困〕ノ如キハ、善ク熟シテ一語ノ如クナリタレバ、擧ゲタリ。

(七) 同語ナレドモ、其意義甚シク變シテ、別語ノ如クナレルハ、別條ニ擧ゲタルモアリ、例ヘバ、金ト同語ナレド、五金ノ總名ト、つりがねト、なたきがねトハ、義甚ダ同シカラズ、又、合フト、逢フトハ、同語ナルベケレド、一ハ共ニナル意ニテ、一ハ相見ル意トナル、此類ハ、皆、別條トシテ掲ゲタリ。

(八) 不可思議以心傳心〔旁若無人〕老少不定ノ類ハ、句ナレドモ、毎ニ音讀ニテ通用シテ、普通辭書ニ收ムベキモノナルガ如シ、因テ句トシテ出セリ。

(九) 和語、漢語、諸外國語ノ別ナク、スベテ、假名ニテ記シテ擧ゲタリ、其音ノ順序ニ據リテ探グルニ便ニセムトテナリ、而シテ、其頭字ヲ、五十音ノ順ニテ列子、其第二字、第三字、第四五字以下モ、スベテ五十音順ニテ列子タリ。

(十) 也行ノい、えト、和行ノうトハ、阿行ノい、う、えト、形同シクシテ別チ難ケレバ、スベテ阿行ノ中ニ收メタリ、故ニ、おや〔老〕つひ〔費〕のもハ、也行ノ順ニ居テ、おい〔老〕つひ〔費〕のい、えハ、阿行ノ順ニ入り、う〔植〕す〔居〕のうハ、阿行ノ列ニアリテ、う〔植〕す〔居〕のあハ、和行ノ列ニ入レリ。

(十一) 濁音、半濁音ハ、スベテ其清音ノ次ニ列子タリ。

以、胤、育、(也)行有、(阿)行字、(和)行衣、英、焉、謁、(阿)行延、營、緣、悅、(也)行等ノ如シ、然レモ、假名ノ形、別チ難ケ
レバ、今ハ皆、阿行ノ中ニ混シ入レタリ、サレド、和行ノ爲、院、域、惠、衛、遠、越等ハ、固ヨリ別テリ、但シ、
烏、永、詠、榮、垣等ハ、姑ク舊慣ノ假名遣ニ因リテ、え、えい、えんトモセリ。

(十九) 要、陽、雄、容ノ類ハ、スベテ約メテ要、陽、雄、容トセリ。

(二十) 歌、和、階、快、庚、光、隔、郭、葛、滑、咸、觀等ノ直音、拗音(濁音ナルモ共ニ)ハ、固ヨリ別チタレモ、下、化、減、
源、決、月等ハ、皆、直音ニテ「げん、げつ」トセリ。

(廿一) 陽、庚、青三韻ト、江、肴、豪ノ三韻ノ漢音(上聲、去聲ノ同韻ノモノニ通ジテイヒ、濁音モ之ニ倣フ、下皆
同シ)トニ屬スル字ノ初發ノ音ハ、スベテ「阿」ノ段ノ音トセリ、即チ、櫻、江、相、唐、囊、包、毛、陽、郎、黃、京、
青、丁、評、明、兩、光等ノ如シ。

又、尤ノ韻ノ一部ナルハ、「伊」ノ段ノ音トセリ、尤、求、州、儔、柔、流等ノ如シ。

又、東ノ韻ノ一部ナルト、虞ノ韻ナルトハ、「宇」ノ段ノ音トセリ、隅、芻、通、風、雄、弓、終、中、隆ノ如シ。

又、蕭ノ韻ナルト、肴ノ韻ノ吳音ナルトハ、「衣」ノ段ノ音トセリ、遙、教、蕭、朝、饒、飄、猫、寮等ノ如シ。

又、東、冬、蒸ノ三韻ナルト、尤ノ韻ノ一部ナルト、江、豪ノ二韻ノ吳音ナルトハ、「於」ノ段ノ音トセリ、應、侯、
宗、東、農、朋、蒙、容、樓、翁、興、承、寵、冰、龍等ノ如シ。

入聲ニテ、緝ノ韻ナルハ、「伊」ノ段ノ音トセリ、緝、急、集、贅、入、立等ノ如シ。

葉ノ韻ナルハ、「衣」ノ段ノ音トセリ、葉、業、妾、蝶、獵等ノ如シ。

合ノ韻ナルト、洽ノ韻ノ漢音ナルトハ、「阿」ノ段ノ音トセリ、押、洽、雜、塔、納、法、蟻等ノ如シ。

又、洽ノ韻ノ吳音ナルハ、「於ノ段」ノ音トセリ、劫、法ノ如シ。

(廿二) 芭蕉、紅梅、襖、發昭(紀長谷雄ノ名)等ノ蕉、紅、襖、昭ノ尾韻ヲ「を」トスルコト、往往古書ニ見エタリ、此類、古代ノ用法トシテ擧ゲ、又、別ニ、芭蕉、紅梅等ヲモ擧ゲタリ。

(廿三) 茴、水、追、回、遺、類等、宇ノ段ノ音ノ尾韻ハ、皆「ゐ」トシ、其餘、愛、海、才、體、快、永、計、世、亭、寧等ハ、皆「い」トセリ。

以上、スベテ漢字音ノ紛レ易キモノハ、後ノ索引指南ノ條ニ、類ヲ以テ集メテ示セリ、就キテ見ルベシ。

(廿四) 眞、文、元、寒、刪、先(上聲、去聲、ノ同韻ノモノ、之ニ同ジ)ノ六韻ニ屬スル字ノ尾韻ハ、舌内音ト稱シテ、皆「ゐ」或ハ「に」ナルコト、讚、岐、蘭、綠、錢、紫苑、等ノ讚、綠、錢、苑、ノ如シ、又、侵、覃、鹽、咸(上聲、去聲、同ジ)ノ四韻ナルハ、唇内音ト稱シテ、皆「む」或ハ「み」ナルコト、三郎、三位、陰陽師、燈心、汗衫、等ノ三、陰、心、衫ノ如シ、然ルニ、今ノ世ニテハ、皆通シテ「ん」トセリ、此篇モ、索引ニ便ナラシメムト、姑ク眞、文、侵、覃等トセリ。

(廿五) 漢語ヲ、漢音ニ讀ムアリ、吳音ニ讀ムアリ、此篇、一ニ習慣ニ從ヒテ擧ゲタリ、布衣、布衣、飲食、飲食、利益、利益、變化、變化、和解、和解、法體、法度等ノ如シ。

(廿六) 發音ノ假名ノ音ノママナルハ、別ニ標セズ、「とらふ」「虎斑」「そゝひ」「内障眼」ノ如シ、轉呼シテ發音スルモノニハ、振假名ヲ付ク、「とらふ」「捕」「そゝひ」「底」ノ如シ、其他、「けふ」「今日」「てうふ」「手差」「ぬあひ」「居合」「あふぎ」「扇」「あふど」「仰」「いはは」「腰」「あはひ」「間」「とほへ」「加はへ」「轉ナド、皆、記セリ、又、「あびふ」「腹」「いはは」「祝」「あらふ」「洗」等ノ「ふは」「ら」「ハ、常

ニ「の、お、ろ」ノ如クモ發音スレド、尙「ふ、わ、ら」ト發スル方、俗ナルガ如クニテ、却テ正シクモアリ、又「あ、ひ、い、は、ひ」あらひ「トイフ時ニモ通ハスベケレバ、今ハ、皆「ふ、は、ら」ノママニセリ。

(廿七) 字音ノ發音モ「おう」を「う」「こう」と「ま、よう」「ち、やう」ノ如キハ附セズ、「あ、ふ」「わ、う」「き、やう」「げ、う」「で、う」ノ如キハ、皆附セリ、但シ、「き、う」「ま、ふ」等ノ「き、ま、は」「さ、ま、ま」ノ如ク發音スレドモ、其音相近ケレバ、今ハ別ニ附セズ。

(後ノ索引指南ヲ見ヨ)

(廿八) 動詞、形容詞、助動詞ハ、皆其本體ニテ擧ゲテ、其下ニ、語尾ノ變化ヲ示セリ、例ヘバ、「ゆ、く、く、ケ、カ、キ、ケ、た、つ、ッル、ッレ、テ、テ、テ、ヨ」「あ、か、し、キ、ケレ、ク、ク」「け、り、ル、レ」ノ如シ、其ノ片假名ナルハ語尾ニテ、●以下ハスベテ變化スルモノト知ルベシ、又一音ノ語ハ、全體ノ變化ヲ擧グ、「ず、スル、スレ、セ、シ、セヨ」「ず、ヌ、チ」「き、シ、レ、カ」ノ如シ。

(廿九) 動詞、形容詞、助動詞ハ、其本體ノミ擧ゲテ、其變化シタル語ヲ擧ゲザレバ、「ゆ、く」ハアリテ、「ゆ、ひ」「ゆ、け」「ナドハ無ク、「あ、か、し」ハアレド、「あ、か、き」「あ、か、く」ナドハ無ク、「け、り」ハアレド、「け、る」「けれ」ナドハ無シ、況シテ、「ゆ、ひ」「ゆ、き」「ゆ、ぬ」「ゆ、か、す」ナドハ無シ、是等ノ「む、ぬ、る、ず」ハ、卽チ、助動詞ノ本體トシテ、別ニ擧ゲテアリ、但シ、動詞ノ名詞トナレルハ出ダセリ、「おもひ」「あ、ぢ、は、ひ」「か、ち」「ま、け」「の、ぞ、み」ノ如シ、又形容詞ノ全ク副詞トナレルモ出ダセリ、「ま、つ、た、く」「た、やす、く」「いた、く」「よろ、しく」ノ如シ、又、形容詞ノ「あ、か、し」「あ、か、き」ヲ音便ニ「あ、かい」「トシ」「あ、か、く」ヲ「あ、かう」スルナドトハ、固ヨリ一一擧ゲズ、唯、變ジテ別ニ一義ヲナセルモノヲノミ擧ゲタリ。

一音ノ語ノ變化ハ紛ヒ易ケレバ、一一出セルモアリ、動詞ニテハ、「と」「來」ノ「くる、こ、き」ノ如ク、「う」「得」ノ「うる、え」ノ如ク、「ふ」「應」ノ「ふる、へ」ノ如ク、助動詞ニテハ、「ず」「不」ノ「ぬ、ね」の如ク、「き」「し」ノ如シ。

(三十) 規則動詞第二類ニテ、「うゑ、うくる、うくれ、うけ」受「やす、やすむ、やすれ、やせ」瘦ナドト語尾ヲ變化スルモノヲ、口語ニテハ、「うける、うけれ、うけ」又ハ「やせる、やせれ、やせ」トイフガ定マリナリ、サテ、此口調ニ從ヒテ出來レリト覺シキ「ける、けれ、け」離ヲ初メトシテ、後世ニ成レル「とける、とけれ、とけ」(カガリテマフ)「いせる、いせれ、いせ」(シラホセテマフ)ナドアリ、サルニ、今更ニ是等ノ語尾ヲ改メテ、「とくる」「いする」ナドスベクモアラズ、而シテ、斯ク語尾ヲ變化スル語、今世普通ニ使用シテ、用アルモノ甚ダ多ケレバ、辭書ニ收メザルベカラズ、因テ、今ハ姑ク規則動詞第四類ノ變體トシテ、即チ、「きる、きれ、き」着「にる、にれ、に」似等ノ同類ニ收メタリ、コハ、韻ハ異ナレド、變化ノ狀ハ、全ク同シケレバナリ。(此事、篇首ノ語法指南ノ動詞ノ變化ノ條ニモ説ケリ、就キテ見ルベシ、次項ノ事モ然リ)

(卅一) 又、規則動詞ノ第三類ニテ、「おと、おくる、おくれ、おき」起「おつ、おつる、おつれ、おち」落ナドト變化スル動詞ヲモ、口語ニテハ、「おきる、おきる、おきれ、おき」又ハ、「おちる、おちる、おちれ、おち」トイヘリ、此口調ニ從ヒテ後世ニ成レル「かうじる、かうじれ、かうじ」増長「たいぢる、たいぢれ、たいぢ」退迫ナドアリ、是等モ、省キガタキガ多ク、又、「かうずる」「たいづる」ナド改ムベクモアラズ、因テ、此類ハ、皆、規則動詞第四類、即チ、「きる、きれ、き」着「ぬる、ぬれ、ぬ」居等ノ同類トセリ、韻モ、變化ノ則モ、全ク相同シケレバナリ。

(卅二) 「きたる」來「トイフ動詞ハ、來」ト有リ「トノ約マレルナルベク、而シテ、ソノ「あり」ハ不規則動詞ナレバソレト同シク、「き、たり」ヲ本體トスベキナレド、今ハ變ジテ、「きたる」ヲ本體トスルガ故ニ、規則動詞ニ改メタリ、又、「ひなる」薰「おどる」御座モ、其原ハ、「ひなり」香居「おどあり」御座有ニテ、不規則動詞ナレド、今ハ變ジテ、規則動詞トナレル「正ニきたる」ニ同シ。又、「ひもす」釀ノ「かも」ハ、「かむ」釀ノ名詞法ノ「かみ」ノ轉ナレバ、

其變化ハ「する、すれ、せ、し」トナルベキ規定ナレド、變ジテ「す、せ、さ、し」ノ變化トナレリ。又「おる」^降ハ「る、るれ、り」ノ變化ナレド、「あま」^天ト約マリテ「あもる」^{天降}トナルキハ「る、れ、ら、り」ノ變化トナリ、又「いふ」^{不往}ハ「いぬ」^往ノ第四變化ノ「いふ」ニ、助動詞ノ「す」ノ添ハリタルニテ、其變化ハ「する、すれ、せ」トナルベキニ、變ジテ「す、せ、さ、し」ノ變化トナレリ。又「でと」^{出來}ハ「いで」^出ト「來」ノ約マレルニテ、「と」ハ、不規則動詞「くる、くれ、こ、き」ノ變化ナレド、「で、おむ、で、おす、トハナラズ」^{とる、くれ、き、き}ノ變化トナレリ。此類、尙、多シ、皆、其變ジタル方ニ收メタリ。

(卅三) 形容詞ノ「おほきし」^大「すむやけし」^速ノ語尾ノ變化ニ異ナルコアリ、篇首ノ語法指南ノ形容詞ノ條ヲ見ヨ。^{す、こ、し}(少)トイフ語モ然リ)

(卅四)「もちゐる」^用トイフ動詞ハ、「もち」^持ト「ゐる」^以トノ熟語ナルコ、疑フベクモアラズ、サレバ、此書ニハ、其語尾ノ變化ヲ「ゐる、ぬれ、ぬ」^{規則動詞第四類}ノ方ニ定メタリ、抑モ、此語ノ語尾ニ就キテハ、語學家ノ間ニ、異說紛紛タレバ、今、煩ヲ憚ラズ、左ニ衆說ヲ擧ゲテ、其考據ヲ述ブベシ。

「和字正濫鈔」^{廿四} 用 もちゐ 此假名、いまだ慥なる證を勘がへず、常ニ、かやうにかけり、是正字ならは、はたらく時、もちゐといふべし、あま、五音の故なり、もちゐといふからず、ゆゑ、いゝと通ず、○「和訓栞」^{前編} もちゐ 用をよめり、以將の義なるべし、もちゐといへり、以を實語に用ゐたるは、論語の、不

使「大臣怨平不」^以の如き是也一説は、藤原經衡集、宇治殿にて、もちひをおとすとて「さかなは、何もあれども、此中に、心につかは、是をもちひよ、返しにも、心もちひとよみ入たり、されは、もちひもちうのかななるべし、ともいへり、○「古言梯」 もちゐ 此假字見えす、まはらう、是によ

る、村田春海云、もちひは、俊頼の歌に、「我をもちひのます鏡と、餅にいひかけたるに、まはらくよりてあるべし、あの假字とせんは、據なき説なり、○「古

事記傳」^{十四} 用の假字は、源仲正家集に、元日戀、千代までも、影をならて、逢見んと、祝ふ鏡の、用ひざらめや(夫木集、三十二に載れり、又、

後なれど、藤原經衡家集も、此、同シ人、宇治殿にて、餅をおとすとて、「肴は、何もあれども、此中に、心よつかは、是を用ひよめし、君が代を心

用ひの、うれしきは、いかなる人の、なほなほなりと餅に云かけたるに依て定りつ、(仲正の後撰集の作者なれば、いまだ假字の亂れざりしほどなり、もろひもちもちある活用言にて、總強など同格の活き也)○山口栞中ノ四「もちふ」といふ詞の活きなり、又そのかなの事、世の人さまゝに、さためこそ、古事記傳十七卷、源仲正の歌を引證しての明辨出てより、誰も、さぞとされるなり、(俊賴朝臣の歌にも、「すゑよりい、われをもちひの、ます鏡、うれしきかけなうつしてをみる、とあれど記傳の考、いよく信從すべしなり、閑居友よ、ちつにもちあることなかれとは、いましめ玉はず、とある如く、かの吉水僧正の比は、これを和行一段の活の格よつかひしならん、かつはおもひよりて、猶考ふれば、尙あるより、まか活かせるためしめりき、蜻蛉日記に、「夢をも、佛をも、もちあるまじや、もちあるまじや、とあるをみるに、こゝといふ辭、まじといふてにはなる文じよりかゝれるは、必一段の活き言なる例なり、かくて、たもへは、夕霧卷に、「人の御名を、よさまにひなほす人は、かたきもの也、そよ心清うおほすとも、まかもちある人を、すくなくともあらめ、こゝろうつしまさうに、聞えかよひ給ひて、尙ありしならんこそよからめ」とあるも、の文字、本より誤りにあらで、かの「夢をも、佛をも、もちあるまじや、もちあるまじや」と同例なりけり、されば、此物語は、數本を見あはせて、人々のとかく校合するにも、このかはれるなし、と聞えたる、そもく、此夕霧卷、あるは、閑居友などは、ぬをもちあやまれるならん、ともいふはいはれぬけれど、かけろふ日記なるい、いかでいはん、此理り、よく明むべし、和語燈七、「病おもければ、藥を用ゐるが如し、と見えたるなども、これらに考へ明むべし、(尙、活語雜誌三篇ノ末ニ用ゐる三斷定シタル文アリ)○中島廣足ノ増補雅言集覽五十五「もちふ用 餅にいひかけたる歌、こゝにあるが如し、もちふと活きたる例を見えず、俊賴集「我をのみ、世にもちひの、かみ草、ささかえたる、かけぞうかへる」といひ、蜻蛉日記、「夢をも、佛をも、もちあるまじや、とさためよと也、(此假字如何考へシ) 群書類從中ノ新撰字鏡、連字部、七嘲調、毛知遊 大同類聚法、用の下、皆由と見えたり、三四ヶ所、布とも見えたるもあれど、傳寫の誤もあらず、多きかたにつくべし、此書、大同ノ敕撰といふあらん、舊事記などの偽書のたぐひまで、いと古き偽書なるべくおぼしければ、假字の證もいへるべくや、もちふ 源州二た、人、はた、あやしき女、世にふりになるなど、もちあるたぐひおほかり、此語、かく和行一段の活の格につかひし事、蜻蛉日記、また閑居友などを引て、山口栞四「こゝはしくいへり、用をもちあるの假字に定めたるを、持率るの義とせる廣道説は誤也、用をもちあるといふ格にする時ハ、義門説の如く、一段の活となれり、率ハ中二段なれば、さらになはず、たゞし、改正圖に、率を一段活に置たり、さらはかなふべくや、○村田了阿が「俚言集覽」モチ牛は持と以との二語にて、一言はあらず、其證ハ、「日本紀一書千時、權用ニ他姫婦ニ以、乳ニ養皇子ニ焉、此世取ニ乳母ニ養兒之縁也、これ用、某

以「三字」は、モチキテとよめる也、「本書」には、豐玉姬將^カ其女弟玉依姬「來到」とあり、又「一書」には、遣^{ヤス}女弟玉依姬「以、來養者也、又「一書」には、留^{トドメ}其女弟玉依姬「持^{モテ}養^カ兒、又別^{コト}とるに、「一書」即遣^カ一尋^ハ鰐^ハ以^カ奉送焉」とあり、將^カ三云云「來」とあるは、キテキタリ、とよみ、「遣^カ三云云」以來は、マタシテキテキタリ、とよみ、「留^カ三云云」持^カはトドメテモテ、とよめり、此持^カ字ハ、用^カをモチとよめる意にて、何れも、同事を文を異^カしてあれども、用^カ將^カ持^カ三字はモチとよみ、又將^カ以^カ二字はキとよみ、又、將來^カと以來^カと同語勢なるをもて、用^カ他姫婦「以養^カは、モチキテとよめるを知るべし、(然るを、舊點^カ、用字を、トリとよめる、非なり)是等、みな、用^カをモ知爲と、古よりつかひたる意也、かくの如く、モチキは一語にあらず、持^カと、以^カと二言の連語にて本は佛書より出しなり、(佛說觀無量壽經)瓔珞盛^カ漿^カ持^カ用上^カ王(法華經信解品)如斯等事以用供養(法苑珠林^{十三} 因緣部)言一切難捨無^カ過^カ己身、我等今日不能^カ捨^カ心持^カ用^カ相與、(同上^{十六} 求婚)時諸獸中有^カ一牛王向^カ於^カ牝虎而說^カ偈言、世人皆取^カ我之養、持^カ用塗^カ地爲^カ清淨、是故端正賢^カ牝虎應^カ當取^カ我以爲^カ夫(同上^{十四} 誕孕)如因^カ果經云、菩薩處^カ胎垂^カ滿^カ十月、身^カ諸^カ支節及以相好、皆悉具足、夫人憶^カ入^カ園遊觀、王勅^カ後宮端正采女凡有八萬四千、以用侍^カ摩那夫人、(同上^{十六} 求婚)食糧罄盡、王子遊獵、殺^カ捕諸蟲、以用活命、(同上^{十七} 離俗)偈言太子以^カ右羅網指萬字千輻輪相現金色柔輦清淨手、用^カ摩^カ馬土捷陟頭、(同上^{三十三} 法施部)迦葉經、爾時世尊而說^カ偈頌曰、三千大世界、珍寶滿^カ其中、以^カ此用^カ布施所得功德少、(同上^{二十九} 優劣)佛說華聚陀羅尼經云、佛言、若復有^カ人持^カ以七寶如^カ須山等、於一切中布施聲聞辟支佛不^カ如下有^カ出家在家人能持^カ一錢以^カ用^カ布施初發^カ菩提心得^カ福德多とあり、古^カ、佛法盛に行はれし故に、持用、以用の連語を、書紀にもつかひ給ひしなり、其が、いつとなく、皇國の一語のやうに、人々思ふ事なりし也、又(韓非子說林)老馬之智可用也、(佩文韻府)「道字」引作^カ老馬之智可用也、(周禮旅師注)師帥也とあり、師は率と同じく、又、率ハ、キとも、訓り、(ヒキキ)も、一語にあらず、本、引と以との連語なり、然れば、師、帥、率、用、四字、皆同じくキと訓すべし、(左右曰^カ以^カの以を、古來キの假字也、(論語)佛^カ胖^カ以^カ中^カ牟^カ畔^カとあるを、(說苑五節)佛^カ胖^カ用^カ中^カ牟^カ之縣^カ畔^カとあり、(國語魯論)魯人以^カ苗人先濟、(注)以、用也、とあれば、これ、用字をキと訓すべし證也、又、將率の將、ヒキキともキともよめは、用、以、將、三字、同じくキともモチキとも訓すべし、又(國語吳語)勾踐用^カ師^カ二三之老、ともあり、假字遣ひの徵は、唐山の書を引もいかなれども、義訓は互通のものなれど、此方の假字遣ひにも徵すべし、(つれく草五^{七十七})ある有職の人、白きものを衣たる日は、火はしをモチキ、くるしめらず、と申されたり、又(八十一)錢を奴のどとしてつかひ用^カものとしらむ、ながく貧苦をまぬかるべか

らず、君の如く神の如く、おそれたふとみて、またが^マチ^チルことなかれ、とあり、契沖氏の説に、用、^マチ^チ、常にかやうなかけり、といはれたる所の常は、つれく
草などをいへるなるよし、餅を^マチ^チとの假字は、字鏡、倭名鈔に見えて正し、然るに、今の世は、定家假字遣、倭字通例書などいふ物に、餅を^マチ^チ、飯を^イ
^チ、とあり、(定家假字遣は、この部に、用、^マチ^チ、又、^マチ^チ部に、用、^マチ^チ、と兩出せり)是等を見れば、夫木集も、經衡集も、俱に、餅を^マチ^チに訛りて、
用は、毛知爲なるも、知るべからず、然れど、餅にかけたりとて、波行の活用とも一定しがたし、因て姑く契沖氏に従て、毛知爲の假字とせり、谷川氏は、
倭訓栞に、經衡集の餅を寄たる事を一説に引ながら、其書の文より、毛知爲のかたを取てつかはれたり、又、活用は、和行にて、^マチ^チ、^マチ^チといふ
べし、急居の訓、^マチ^チもあるを、^マチ^チと訓る例なり、○榊原芳野氏が説(洋々社談五十五號)二曰く、古事記傳^七は、源仲正の集を引て、用字の活用
を、は行中二段の者とす、元亨建武前より、は行中二段の活も難じれりを見て、伏見院天皇薫物合の文中、用ふの語あり、されど、用を餅とい
ひかけたるは、所謂雙關として、假借の音なること、即ちあしびきの山居^{ヤマノイ}を病^{ヤマノイ}といひなし、今や今や^{イマヤ}を^{イマヤ}と通ぜしと同じ、且假字の違なしと
もいひがたき時代の歌なれば、かた^カた^タたしかなる證と爲難し、然れば、中島菰原二氏の和行一段の語と定められしなり、さるを、蜻蛉日記の用
るよしや、用るるまじやの一語にて、信難^{ウケガタ}しとて、後世の中二段に據れる書ども、此頃は、かつく見ゆれど彼の用るる例は諸書に多し、蜻蛉日記の
文章のやすらかあらぬと、誤多き、人の知る所なれば、疑あらん理なれど、我が一わたり見し書の中にも、一段なる例證猶多し、其外は用るるのみあるは、
數へがたきものであれど、かゝる確ならず、古き書に、宇治拾遺物語^四唐綾一ツを、唐に、美濃五匹がほにぞ用るるなる(俗本、^ハを^ハに作る、古
寫本、^ハに作り又、寂蓮自筆の薰集類抄、貞丈校本、群書類従本、皆同じ)には、少しなりとも、黒方を用るるべきなり、又、公事根源^中孝經、禮
記、毛詩、尙書、論語、周易、左傳、年年めくりてもある又、神皇正統記「文字をもちる事、之より始れり」又、古本遍照發揮性靈集^四の傍
訓に、能書必用^ハ好筆^ハことあり、されは、中古まで、漢文を讀むにも、用ひ用う用ゆなどの訛なかりしと見えたり、此頃、ふと見出でたるに、かくあれば、
猶其證いくちもあるべし、されど、其活用を知らんに、上の書どもにて足りなかりし、

右ノ説ドモヲ參考スルニ、「もちぬ、もちぬる」トスル説、着着考證アリテ、動カスベカラザルガ如シ、「もちぬ
ハ、固ヨリ論ズルニ足ラズ」、「もちひ、もちふ」ノ考據モ甚ダ弱キガ如シ、何トナレバ、「もちふ、もちふる」ト用井
タル證、一ツモ出デザルノミナラズ、其ノ「もちひ」モ、榊原氏村田氏ノ考ニ據レバ、「いひひけ」トモ訛トモ言

フベケレバナリ、又「もちゐる、もちう」ノ説モ承ケラレズ、サルハ「もちう、もちうる」ト用井タル證モ、サラニ無
ケレバナリ、崇神紀ニ、急居此曰「菟岐宇」トアレバトテ、異ナル語ヲ取リテ證トスルハ、確ナシザルノ
ミナラズ、急居ヲ「つきう」トイフ、唯本書ニ一處見エタル異例ニテ、此他サラニ見エズシテ、後ノ諸書
ニハ、スベテ、音便ニ「ついゐる」トノミ用井タリ、サレバ「もちゐる」「つきゐる」「ひきゐる」等ノ語ハ、共ニ、其語尾
ハ「ゐる、ぬれ、ぬ」ノ變化ナリ、ト斷定スベシ。

(卅五)「あきらか」明「あづか」靜「つまびらか」詳ナドイフ一類ノ語ハ、ソノママニテハ用井ラレズ、必ズ下ニ「よ」ヲ添
ヘテ、始メテ用ヲナス、故ニ、此篇ニハ「あきらかよ」「あづかよ」「つまびらかよ」ナド、一一「よ」ヲ添ヘテ、副詞トシテ擧ゲタリ、
又、此ノ「よ」「三」あり「ノ」添ハリテ「あきらかふり」「あづかふり」トナルコアリ、此類一一擧ゲズ、擧グルニ堪ヘザ
レバナリ。(篇首ノ語法指南ノ助動詞ノ「ふり」并ニ副詞ノ條ヲ見ヨ)

(卅六) 語別ハ、畧語ノ標ヲ以テ、各語ノ下ニ記セリ、例ヘバ、(名)ハ名詞ナリ、(代)ハ代名詞ナリ、(動)ハ動詞ナ
リ、(形)ハ形容詞ナリ、(助動)ハ助動詞ナリ、(副)ハ副詞ナリ、(接)ハ接續詞ナリ、(辭)ハ天爾遠波ナリ、(感)
ハ感動詞ナルガ如シ、又、動詞ノ下ニ、(自動)(他動)ナド記セルハ、自動詞、他動詞ナリ、(規、一)(不規、一)等
ハ、規則動詞第一類、不規則動詞第一類ナリ、(形、一)ハ形容詞第一類ナリ、凡ソ、是等ノ事ノ詳ナルハ、
前ノ語法指南ヲ見ルベシ、又、其畧語符號等ノ解ハ、スベテ後ノ索引指南ニ委シ。

(卅七) 動詞ハ、スベテ本體(第一變化)ニテ擧ゲタレバ「生ク」「避ク」ナドイフ語モ、

い・と・ク・ケ・カ・キ・ケ (自動)(規、一)

い・と・ク・ケ・カ・キ・ケ (他動)(規、一)

い・と・クル・クレ・ケ・ケ・ケヨ (他動)(規、二)

い・と・クル・クレ・ケ・ケ・ケヨ (他動)(規、二)

い・と・クル・クレ・キ・キ・キヨ (自動) (規、三)

ふ・と・クル・クレ・キ・キ・キヨ (他動) (規、三)

右ノ如ク三様ノ語、皆、「い・と・と」ノ同形ニテ出ヅ、サレバ、動モスレバ、迷フコアルベシ、善ク其下ナル語尾ノ變化、并ニ(自動)(他動)(規、一)(規、二)(規、三)等ヲ見テ思ヒワクベシ、注釋ノ文中ニモ、紛レ易キハ、皆(規、一)(規、二)ナドト記セリ、心ヲ付クベシ、サレド注文ノ中ニテ、自他ノ甚ダ迷ヒ易キハ、第二變化ヲ用井タルモアリ、「つどふ」つどふる「集」たむふ「違」ノ如シ。

(卅八) 篇中、每語ノ下ニ、直ニ標出セル漢字ハ、雅俗ヲ論ゼズ、普通用ノモノヲ出セリ、「日月山川」等ノ正字ハ、固ヨリ論ゼズ、「辻峠」杜若ノ如キ和字又ハ誤用字ニテモ、通俗ナルヲ擧ゲタリ、而シテ、和漢通用ナルハ、「日月山川」ナドト標シ、又、和用ナルハ、「辻」杜若ナドト標シテ、語釋ノ末ニ、別ニ漢用字ヲ掲ゲテ、十字街、燕子花ナドト標セリ、此類、識別スベシ、但シ、漢字ノ當ツベカラザルモノハ、スベテ闕ケリ。

(卅九) 語原ノ釋ハ、上下ニ「」ヲ加ヘテ、語釋ト別テリ、而シテ、其原義ノ分明ナルハ掲ゲズ、又、或ハ究ムベカラザルモノ、推測ノ信シ難キモノ、等ハ姑ク之ヲ闕ケリ、漢語ハ、異常ナルモノノ外ハ釋セズ、其他、韓語、梵語、琉球語、蝦夷語、葡萄牙語、西班牙語、羅旬語、蘭語、佛語、英語等ハ皆釋セリ、原語ノ洋字等モ、索メ得タル限りハ擧ゲタリ、但シ、近古、西班牙人、葡萄牙人、蘭人等ノ傳ヘタルモノト覺シクテ、詳ナラザルハ、姑ク南蠻語、或ハ洋語ナドト記シ置ケリ。

(四十) 語釋ハ、一二語ヲ以テセルアリ、數語ヲ以テセルアリ、或ハ、同意ノ異語ヲ用井、或ハ近似セル他語ヲ用井、或ハ、古言ヲ今言ニ易ヘ、雅言ヲ俗言ニ當テ、或ハ、今言俗言ヲ古言雅言ニテ釋キ、種種ニ說キ、迂廻ニ述ベテ、一二意ノ融クルヲ期シテ已メリ、看ル者、善ク玩味シテ解スベシ、然レモ、凡ソ、解釋語ノ意

ハ、到底、其本語ノ意ニ若カザルモノナリ、トモイヘバ、又善ク此趣ヲモ諒セヨ。

(四十二) 典例、儀式、藝術、裝飾等、凡百ノ事物ノ、明治維新前後ニテ、大ニ變遷シ、或ハ、全ク廢セラレ、或ハ、尙稀ニ存スルガ如キモノモアリ、此類ノ語釋ノ、往時ノママニテ、一一存廢ヲ言ハザルモアリ、看ル者斟酌スベシ。

(四十二) 洋語ノ翻譯ニ出デタル語ハ、譯者ノ筆ニ因リテ、譯語區區ナルモノモアレバ、篇中多ク收メズ、後ノ一定ノ時ヲ待タムトスルヲ、篇首ノ編纂大意ニモ述ベタルガ如シ。又、熟ヲ思フニ、外來事物ノ新語ノ如キハ、洋書ノ全備セルモ多ケレバ、就キテ求メムニ、其道ヲ得ムヲ、容易カルベシ、内國舊來ノ事物ノ如キニ至テハ、辭書類書ノ全書ニ乏シクテ、一二事物ノ解ヲ得ムトスルニモ、數書ヲ涉獵セザルベカラザルガ如キヲ多シ、此ノ故ニ、此篇ハ、内國從來ノ事物ヲ網羅スル方ニ、力ヲ專ラニセリ、看ル者中外ノ事物ニ於テ、偏重スル所アルガ如キヲ咎ムルヲ勿レ、尙大成ノ如キハ、後ノ増補ヲ期スベシ。

(四十三) 從來ノ辭書ノ語釋ノ書法ハ、語毎ニ、「何何ふり」「何何をいふ」ナドト記セリ、斯ク、「ふり」をいふ等ノ語ヲ、注毎ニ加フルガ故ニ、全冊嵩ムノミナラズ、甚ダ辭書語釋ノ體裁ヲ失セリ、此篇ニテハ、凡ソ、文章中ニテ、其本語ト語釋ノ語ト置キ易フル時ハ、原文、ソノママニ文ヲ成シテ解スベカラシムル書法トシ、名詞ハ名詞ニテ釋キ、動詞ハ動詞ニテ注シ、副詞ハ副詞ニテ說ケリ、例ヘバ、「あまたさ」トイフ副詞ヲ、舊注ノ書法ナラバ、「朝はあまたさ」ナド記スベキヲ、此篇ニテハ、「朝早ク」トノミ注セリ、サレバ、原文、「朝まだき嵐の山の寒ければ」ナドアラム處ニ、コレヲ置キ易フレバ、「朝早ク嵐の山の寒ければ」トナリテ、ソノママ文ヲ成シ、意モ合ヒテ解セラルベシ、コレヲ舊注ノ體ニテ置キ易フレバ、「朝はあまたさ嵐の山の寒ければ」

トナリテ、合フベクモアラズ、通篇語釋ノ書法、スベテ此ノ如シ、然レテ、天爾遠波ノ「が」の「に」をノ如キ、副詞ノ「はらはら」と「ほとほと」ノ如キ、感動詞ノ「あふむ」ノ如キ、音響情態ナド狀出スル語ノ、他語ノ代フベキナキナドハ、「何何ノ意ヲイフ語」ナドト注セルモアリ。

(四十四) 同義ノ語數種アルキハ、其正語、又ハ普通語ト覺シキ方ニ釋シテ、其古言、俗言、方言、訛言ナドノ方ニハ、「某語ニ同シ」又「某語ノ古言、又ハ俗言」ナドト記セリ、「にはとり」〔鶏〕にはつとり「なびなきどり」もふつけどり「うすべどり」ひけ「ナドハ、」にはとり「ニ注シ、」せけ「酒」さ「と」ナドハ、「せけ」ニ注シ、「めし」〔飯〕いひ「まゐ」はん「ナドハ、」めし「ニ注セルガ如シ。

(四十五) 「けふ」ふんにち「今日」ことし「たうねん」當年「みづひね」すぬぎん「水銀」はらわたちやう「腸」かり「がん」雁ナド、和語、漢語、同義ニシテ、通用ニ差別ナキハ、和語ノ方ニテ釋キ、「やまびと」せん「仙人」ふとふとし「はい」肺「ふぬ」ぢしん「地震」にはとふふり「せきれい」鶺鴒ナドハ、一方、和語ナレドモ、今ハ不通ナレバ、通用ノ漢語ノ方ニテ釋キタリ。

(四十六) 同意語(Synonyme)ハ、語釋ノ末ニ列子タリ、例ヘバ、「とふ」食ノ注ノ末ニ「くらふ」はむ「だふ」たうふ「ナド列子、又「あふのと」仰ノ末ニ「あふぬと」あふむと「あなのと」あなむと「ナド列子タルガ如シ、「わらうづ」わらうづ「薬香」わらんづ「わらんぢ」わらんぢ「草鞋」ナドハ、畢竟同語ニテ、音便ノ差アルノミナレド、亦、同意語トシテ列子タリ、其他ノ事物、殊ニ動植物ノ名ニハ、諸國ノ方言等ニ、同意語多シ、其著キモノハ、皆此例ニ從ヘタリ。

(四十七) 數種ノ語ヲ、類ヲ以テ、一語ノ下ニ集メテ、其意ヲ釋クキハ、大ニ説明スニ便ナルコトアリ、然ルキハ、餘ノ各語ノ下ニハ、「某語ノ條ニ注ス」或ハ「某語ノ條ヲ見ヨ」ナドト記セリ、例ヘバ、「わ」輪ノ條ニ、「輞」オモリゴシ「轂」オモリゴシ

輻等ヲ集メテ說キテ、「おほむかしきや」ト下ニハ「輪ノ條ヲ見ヨ」ト記セルガ如シ、又密ニ相關ハル語ドモニハ、條毎ニ注シテ、互ニ「某語ノ條ヲ見合ハスベシ」ナドト記シタリ。

(四十八) 動植礦物、其他諸物ニ、同名異物甚ダ多クシテ、注解ノ文中ニ、紛レ易キヲアリ、斯ル時ハ、漢名ニテ、記シテ傍訓シオケリ、「苳麻」イナヒ「黃麻」イナヒ「蘘蕒」エヒカン「蒲萄」エヒリヅラハ如シ、サレバ、ソノ「いちい」いひ「かづら」ヲ索メム時ハ、善ク其漢名ノ字ニ心ヲ付クベシ。

(四十九) 動植礦物ノ注ハ、其各學問上ノ綱目等ノ區別ヲ以テ說クベキナレド、今ノ普通邦人ニハ、解シ難カルベシト思ヘバ、今ハ、姑ク、本草家ノ舊解ヲ採リテ、眼ニ視ル所ノ形狀ニ就キテ說ケリ。

(五十) 解釋文中ノ挿注ニハ、上下ニ「」ヲ置キテ別テリ。

(五十一) 同一ノ語ナレドモ、古今ニ因リテ意ノ移レルアリ、所用ニ因リテ義ノ變ズルアリ、此類ハ、一一(一)(二)(三)(四)(五)等ノ標ヲ以テ區別セリ、而シテ、其次第ハ、古義ヲ先トシ、今義ヲ後トシ、或ハ正義ヲ前ニ掲ゲ、轉義、訛義等ヲ末ニ置ケリ。

(五十二) 成句ニ入リテ、同語ノ異義ヲ成スモノアリ、「骨を折る」ハ、「骨ヲ取りテ正シク折ル」ニハアラデ、「勉メ働ク」意ヲナシ、「言を食む」トイヘバトテ、無形ノ言語ハ食ムベキニアラズ、乃チ「言ヒ契リタル」ヲ違フノ意トナル、是等ノ成句ハ、其類語ノ下ニ、別ニ、○ヲ記シテ擧ゲタリ、而シテ、「骨ヲ折ル」ハ「骨」トイフ語ノ下ニ出シ、「言ヲ食ム」ハ「食ム」ノ下ニ出セリ、類ニ從ヒテ索ムベシ。

(五十三) 解釋文中ノ例語、例句、ナドノ處ニ、其條ノ本語ノ出ヅル時、重出ノ煩ヲ省カムガ爲ニ、其本語ニ當ツルニ、「」ノ標ヲ以テセリ、例ヘバ「あし」足ノ釋文中ニ、「机ノ」一「或ハ」膳ノ「」ナドアルハ、「机ノ足」或ハ

「膳ノ足」ナリ、又「あご」上ノ下ニ、「髪ヲ―價ヲ―」ナドアルハ、「髪ヲ上グ」價ヲ上グ」ナリ。

(五十四) 凡ソ、此篇中ノ文章ニ見ハレタル程ノ語ハ、即チ、此辭書ニテ引キ得ルヤウナラデハ不都合ナリ、因
テ、務メテ其等ノ脱漏齟齬ナキヤウニハシタリ、然レモ、凡ソ萬有ノ言語ノ、此篇ニ漏レタルモ、固ヨリ
多カラム、殊ニ、漢語ノ限り無キ、編輯ノ際ニ、是ハ普通用ノ語ナラズトシテ棄テタルモノノ、知ラズ識
ラズ釋文中ニ見ハレタルモアラムカ、唯看ル者ノ諒察ヲ請フ。

(五十五) 釋文ノ意ヲ悉クシ難キ所ニハ、圖畫ヲ加ヘバ、更ニ妙ナラムトモ思ヘド、初版ハ其率ニ及ビ難シ、
後ノ増補ヲ俟ツ。

引 指 南

下ノ如シ、片假名ニテ記シタル者同ジ。

中二字目、三字目、假名毛、皆此、如之シ。

レガ、頭字ノミナラス、二字目モ、三字目モ、皆サヤウニテ、手間取ルト甚シ、

ダ阜シ。

名ヲモ同ジ

アリ。

9.

ウト「ナドトシタリ、一ニテ六、假名ノ順ヲ定メカセバナリ。

覺エシ。

上フおろ、かふ等ノ、ふニ、お、如ク發音スルキアリ、心ヲ付
スシ。

おふ(生) かかふ(抱) かふ(替) へふ(加) ちふ(支)

あふ^ニ（強）そふ^ル（添）そふ^ル（揃）たふ^ル（湛）たふ^ル（堪）つか

ふ^ル(支)まふ^ル(施)ひかふ^ル(控)なまふ^ル(軟)ナドノふヲ、ゆニ

誤り、又ゴレト反ニテ、おほゆ(覺)きこゆ(聞)さかゆ(榮)たゆ(怠)

(絶)はゆ(生)むくゆ(報)ナドノゆヲ、ふニ誤リ、又、ひきゐ

る(用)もちゐる(用)ヲ、ひきゆ、もちゆト誤り思フコトナド

終

又、あふぎ(扇)あふみ(近江)或ハ、あふり(泥障)あふひ(葵)

あふぐ^オ(仰)たふる^オ(倒)或ハ、あゆ(貼)はへ(蟬)かへる(蛙)あや

にく(生憎)或ハほほホ(頬)あかほコホ(赤穂)まをすモ(申)まをかモ(眞

岡⁺あ⁺た⁺め⁺(青梅)あ^コか^コた^コ(赤魚)ナド迷^ヒヒヤスキテ、尙、多^シシ、ス、ス、

テ心ヲ付スシ。

(九) あたる^{・エ・レ・ラ・リ・レ} (當) あかし^{・キ・ナ・レ・ク・ク} (赤) 斯ク假名ノ間ニ點ナル

ハ、語根ト語尾トノ界ニテ、其下ニアル片假名ハ、語尾ノ變化ナリ、故ニ、

ヨリ下ヲ置替ヘテ、あたる^{・エ・レ・ラ・リ・レ}、あたれ^{・エ・レ・ラ・リ・レ}、あたり^{・エ・レ・ラ・リ・レ}、又ハ、あかし^{・キ・ナ・レ・ク・ク}、あかき^{・キ・ナ・レ・ク・ク}、

あかけれ^{・キ・ナ・レ・ク・ク}、あかく^{・キ・ナ・レ・ク・ク}ナドトシテ、其變化ヲ知ルベシ。但シ、う^{・ウ・リ・レ・ウ・レ・エ・エ・エ}、

(得) 又ハ、く^{・ク・ル・ク・レ・コ・キ・コ} (來) す^{・ス・メ・チ・不} ナドハ、語根ト語尾トノ分レ

目ナレバ、ヲ界ニシテ、全體、變ルモノト知ルベシ。

尙、右ノ變化ノ委シキコト(同シ變化ノ重複ニ出デ居ルナドハ、前ノ語法指

南ノ動詞、形容詞、助動詞ノ所ヲ見ルベシ。

又、右ノあたる^{・エ・レ・ラ・リ・レ}、あかし^{・キ・ナ・レ・ク・ク}、ナドハ、あたる^{・エ・レ・ラ・リ・レ}、あかし^{・キ・ナ・レ・ク・ク}、トノミ出シテ、あたれ^{・エ・レ・ラ・リ・レ}、あたり^{・エ・レ・ラ・リ・レ}、あ

かき^{・キ・ナ・レ・ク・ク}、あかく^{・キ・ナ・レ・ク・ク}ハ、別段ニ出シテ置カザレバ、其心ニテ、變化ヲ考ヘテ、所所、引

キ當テテ見ルベシ。

又、みつ^{・ミ・ツ・ム・ク・ル} (満) むく^{・ム・ク・ル} (向) おつ^{・オ・ツ・ム・ク・ル} (落) うく^{・ウ・ク・ル} (受) ナドモ、スベテ、みつ^{・ミ・ツ・ム・ク・ル}、むく^{・ム・ク・ル}、おつ^{・オ・ツ・ム・ク・ル}、う

く^{・ク・ル}ニ出デタレバ、ハ添ハラズ其心ニテ引スベシ。又、語尾ノ變化ハ異ナリテ

モ、同シ形ニテ出デタルモノ多シ、例ハ満ツ、向シニテ、

みつ^{・ミ・ツ・ム・ク・ル} (自動) (規一) むく^{・ム・ク・ル} (自動) (規二)

みつ^{・ミ・ツ・ム・ク・ル} (他動) (規二) むく^{・ム・ク・ル} (他動) (規二)

右ノ如シ、善ク其下ノ異ナル所ニ氣ヲ付ス。

(十) わづか^{・ワ・ヅ・カ} (僅) あづか^{・ア・ヅ・カ} (靜) あきらか^{・ア・キ・ラ・カ} (明) さまやか^{・サ・マ・ヤ・カ} (細) ナドイフ言葉ハ、スベ

テ、下ニヨヲ添ヘテ出ダシタレバ、其假名ノ順ノ所ヲ見ルベシ。

(十一) 注ノ中ニ、「約」トアルハ、つづまりナリ、「略」ハ、はぶかりナリ、「轉」ハ、うつりナリ、「延」ハ、のびナリ、「通」ハ、かよひナリ、「義」ハ、わけナリ、「意」ハ、おもひナリ、「訛」ハ、なまりナリ。

(十二) 活字ノ用中、方ハ左ノ如シ。(スベテ、引出ス言葉ニ就テイ)

やま(山) かは(川) 此活字ナルハ和語ナリ。

きん(金) てつ(鐵) 此活字ナルハ漢語(字ノ音ノ語)ナリ。

アン(餡) バン(麵包) 此活字ナルハ唐音ノ語、其他ノ外國語ナリ。

あかたひ(赤鯛) あめがた(天下) およくだい(燭臺) アマテラ(尼寺)

此ノ如ク、假名ノ間ニ小キ筋アルハ、組立テタル言葉ト言葉トノ界ナリ。

然レトモ、いしばひ(石灰) てんか(天下) ノ如ク、一度ハ其間ニ界ヲ立ツレド

モ再ビ、いしばひ(石灰) いつてんか(天下) ナドト出ツルトキハ、い

しばひ、又ハ、てんかの間ニ界ヲ立ツズ。

あいらし(可愛) あかめ(赤柑子) アカとり(閑伽取) きんカラ(金)

唐草) アンなしまんぢう(無餡饅頭) ナドハ、和語、漢語、外國語ノ雜ナリ、

活字ノつかひわけニテ知ルベシ。

あんぢゆ(槐) きやはん(脚半) くわち(菓子) チマ(猪口) てつばら(鐵砲)

カバ(合羽) ナドト、假名ノ間ノ右ノ方ニ、小キ筋アルハ、促ル音ノ標ナリ。

さいはひ(幸) けふ(今日) ゐあひ(居合) ちやち(磁子) えうせう(幼少)

ナドト振假名アルハ、口ニテ呼フ聲ノ標ナリ。

畧

語

解

- (名)……………名詞 (體言) (Noun.)
- (代)……………代名詞 (Pronoun.)
- (數)……………數詞 (Numeral.)
- (動)……………動詞 (用言、作用言、語幹) (Verb.)
- (自動)……………自動詞 (然ル詞) (Intransitive.)
- (他動)……………他動詞 (然スル詞) (Transitive.)
- (規)……………規則動詞 (正格活用) (Regular.)
- (不規)……………不規則動詞 (變格活用) (Irregular.)
- (規一)……………規則動詞、第一類 (四段活用)
- (規二)……………同……………第二類 (下二段活用)
- (規三)……………同……………第三類 (中二段活用)
- (規四)……………同……………第四類 (一段活用)
- (規四變)……………同……………第四類、變體 (下一段活用)
- (不規一)……………不規則動詞、第一類 (加行變格)
- (不規二)……………同……………第二類 (左行變格)
- (不規三)……………同……………第三類 (奈行變格)
- (不規四)……………同……………第四類 (良行四段一格)
- (形)……………形容詞 (形狀言) (Adjective.)
- (形一)……………形容詞、第一類 (タ、シ、キ、活用)
- (形二)……………同……………第二類 (シタ、シキ、活用)
- (助動)……………助動詞 (活用アル天爾遠波) (Auxiliary.)
- (副)……………副詞 (Adverb.)
- (接)……………接續詞 (Conjunction.)
- (辭)……………天爾遠波 (Post-position.)
- (感)……………感動詞 (詠歎) (Exclamation.)
- (接頭)……………接頭語 (Prefix.)
- (接尾)……………接尾語 (Suffix.)
- (發語)……………發語
- (枕)……………枕詞
- (句)……………句 (Phrase.)

種

種

標

- 〔……………古キ語、或ハ、多用キ支語、又ハ、其注ノ標。
- 〔……………訛語、或ハ、俚語、又ハ、其注ノ標。
- 〔……………和ノ通用字、迂 枉若 ナドナリ。
- 〔……………漢ノ通用字、十字街、燕子花ナド。(注ノ中ニ置ク)
- 〔……………和漢通用字、日 月 長 短 ナドナリ。
- 〔……………語ノ原ノ注界
- 〔……………挿注ノ界。
- (一)(二)(三)等……………注ノ意味ノ變ハル界。
- 「……………例ニ示ス句、又ハ、格段ナル句ノ界。
- 、……………句讀。
- ・……………段落。
- ……………句ト成リテ、別ニ二ツ意味ヲ起ス。
- ……………引出ノ語ノ略標。例ハ、あぐ よノ注ノ中ニ、「髪ヲ」
價ヲ「トアル」髪ヲ上ク價ヲ上クナリ、あし(足)ノ注
ニ、「机ノ」膳ノ「トアル」机ノ足膳ノ足ナルガ如シ。
但シ、此筋ハ、其語ハ、一音アルニモ、二音、三音、四五音
アルモ、其長サ皆同シ。
- ステ、委シク此字引ノ用キ方ヲ知ラヌトナラバ、前ノ語法指南、并
ニ、凡例、ヲ見ルベシ。